「友松」の変遷 Ⅱ

2010.12.18 発行
シリーズ 2−6
「友松」40 号

（1）　第四〇号　友松会報　昭和31年1月25日

母校の在り方
教員養成機関について
会長 小林梅茂（大四年卒）

現代の大学生気質
学芸学部教授文博 宮島肇

所感
学芸学部附属鎌倉小・客員 浜田

ウイーン会議の旅
楽議院議員 籐

この号の「母校の在り方」と題する会長の巻頭言によると、当時の学芸学部は「教員の養成を目的としているとはいい得ない」と述べている。

そして、後段に「依って理事支部長の会合で旧冬討議を願ったところ満場一致非常なる熱意を以って積極的に基本的には学校制度を改めて『学芸学部は教員養成の機関たることを明記』させること。母校の実情も現実には教員養成している実情にあるのだから遺憾なきを期すること、の結論がまとまり新春を期して強力な委員会を組織してこの目的達成のため邁進することとなった」と記している。

３５号で紹介した厚生施設の「法律相談」の担当者には、飯島氏（明４３卒・前検事・弁護士）と小林会長（大４卒・弁護士）がなり、「結婚相談」の担当者には、森田氏（常任理事）がなっている。

戦後、民法の改正、農地法の制定などにより「会員の中に新旧思想の撞着を如何ともすることが出来なくなり『如何に解決したらよいか』と焦慮せらるる向が少くない」と書かれている。

また、結婚相談は「男子からの申込みは少なく、女性の方からは殺到しています」と書かれているのを見ると、戦後の世相がうかがえる。

第四〇号　友松会報　昭和31年1月25日　（2）

記念品贈呈
厚生施設
法律相談
結婚相談
支部だより

県外からのお便り

左の「県外からのお便り」には、東京、群馬、神戸、静岡からの会員の声が寄せられている。それぞれ、鎌倉で過ごした思い出とともに、各地での活躍の様子が書かれていて興味をひく。

また、昭和３０年に「日展」に入選した、添田氏（Ｓ１２年卒）三橋氏（Ｓ５年卒）猪瀬氏（Ｔ１５年卒）の名前と作品名を見ることが出来る。